

## 第19回

書道監修・執筆 加藤泰弘

## 手書きのぬくもり ～漢字仮名交じりの表現～

## 今回学ぶこと

今回は漢字仮名交じりの書の創作に挑戦する。私たちの身の回りには、手書きによる豊かな文字表現が広がっている。目的と用途、また伝えたいことやイメージによってさまざまな表現がある。花屋さんを書でイメージアップすることを通して、用具・用材を工夫しながら書の表現の幅を広げていく。また、作品の鑑賞や保存のために、布や紙を使って、巻物や掛け軸に仕立てる表装について理解する。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

用具・用材、書体、書風、表装<sup>ひょうそう</sup>（掛け軸、巻物、屏風）

## イメージにふさわしい表現

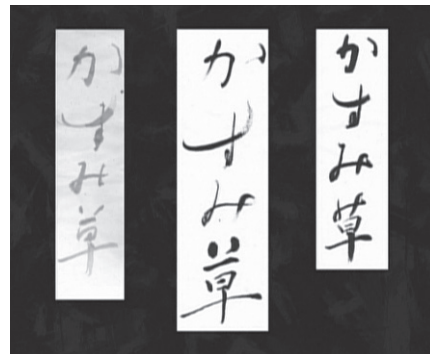
書というのは言葉をどのように書くかということが大切です。まず、場面や目的に応じて、どのように表現したらよいかを構想します。それぞれのイメージにふさわしい表現を構想して作品にすると、伝えたい思いが作品の中に表れます。

表現にあたっては、これまで学習してきた漢字や仮名の古典で学んだ書風の違い、筆使い等を参考にすることが大切です。

## 用具・用材の工夫

用具・用材を工夫することによっていろいろな表現ができます。イメージに基づいて作品を構想し、それにふさわしい用具・用材を選択します。

## 今回のお手本



紙には、墨が浸透する良くにじむ紙や表面に加工が施され、にじみにくい紙などがあります。また、墨には、同じ黒でも青系や茶系など違った色合いがあります。また、墨を濃くすれば力強い表現になりますし、繊細な表現をするときは淡墨にして、にじみによって効果的な表現をすることもできます。筆にも硬い筆、柔らかい筆があり、穂の長さ、また使い方によっていろいろな表現が可能です。言葉のイメージを大切にしながら、用具・用材を工夫してみましょう。

## 表装 作品を飾る

作品の鑑賞や保存のために、布や紙を使って仕立てることを表装と言います。掛け軸、巻物、屏風、額などがあります。今回取り上げた「屏風」は畳むとコンパクトになり、広げると絵や書が横に展開して、作品と表装が一体となって美を放ちます。これらは暮らしの中に“美”を求める日本人によって芸術の域まで高められ、現代に息づいていると言えます。



達人からひと言！

日本語の書き言葉は漢字、平仮名、片仮名の三種類の文字があります。それを交えて漢字仮名交じりとして書くことで豊かな表現を可能としてきました。これまで学習してきた漢字の書や仮名の書の古典を参考にしながら、自分のイメージを大切にしながら自由で広がりのある表現を試みてください。書体や書風を選択したり、用具・用材を工夫しながら豊かな表現を体験していきましょう。



達人

加藤泰弘